

社会厚生常任委員会行政視察報告書

1. 日 程 平成 28 年 2 月 10 日 (水)
2. 視察先等 見附市 人口 41,862 人 (平成 22 年国勢調査)
面積 77.91 km²
3. 視察事項
 - ・地域子育て支援センター事業について
 - ・中越福祉事務組合 まごころ学園・まごころ寮ほかを視察
4. 視察者
 - 委員長 滝沢茂秋 随 行 美原弘美
 - 副委員長 大平一貴 (議会事務局主査)
 - 委 員 保坂裕一
 - 委 員 中野元栄
 - 委 員 安田憲喜

◎見附市の概要

南北に長い新潟県のどまんなかに位置するまち、見附市。新潟県の重心地（新潟県の地図を開いたときバランスのとれる地点、北緯 37 度 31 分 19 秒・東経 138 度 54 分 50 秒）が見附市にあります。

市内には、信濃川水系の刈谷田川が流れ、豊かな水と清涼な空気に恵まれています。豊かな自然、県内でも有数の田園地帯を保有していることから、春の芽吹き、夏の深緑、秋の紅葉と黄金色の稲穂、そして冬の銀世界、四季折々の風情を味わうことができます。

市内には、医院やスーパーなど生活に欠かせない施設も多くあり、市民の生活を支えています。また、北陸自動車道など交通網にも恵まれ、自動車で 30 分足を伸ばせば、海に山にさまざまなレジャーを堪能できます。

そんな、美しく、利便性の高い環境に囲まれて、まちにはいつも市民の明るい笑顔があふれています。

○子育て支援センター事業について

市内に 3 か所設置し、年間予算 2,800 万円で運営している（加茂市 H26 年決算 561 万円）。施設の事業内容は、①育児不安等についての相談。②遊びの広場の開設。③子育てサークル等の育成・支援。④保育資源情報の提供。⑤乳幼児の一時預かり。①相談件数は、H26 年度 949 件（加茂市 27 件）。遊びの広場利用者は、H26 年度 3 施

設合計 20,107 人（子どものみ）（加茂市 8,523 人）。⑤一時預かりの利用件数は、H26 年度 484 件。

職員配置

名称	正規職員数	パート職員
学校町 子育て支援センター	センター長 1名 (8:30~17:15)	保育士(8:30~16:30) 2名 子育て支援員(9:00~17:00) 1名 ファミサポアドバイザー(9:00~17:00) 1名
新町 子育て支援センター	主任保育士 1名 (8:30~17:15)	子育て支援員(9:00~16:30) 1名
今町 子育て支援センター	主任保育士 1名 (8:30~17:15)	子育て支援員(9:00~16:30) 1名

【所感】

施設があるだけでなく、情報提供、地域内の連携に取組み結果として利用者が多くなっているように感じた。加茂市では、相談、子育てサークル等の育成には積極的ではなく、乳幼児の一時預かりを行っていないが、見附市の利用状況を見る限り今後取り組む必要があるのではないかと。年間予算を増額し、支援員の増員、子育て世代と近い年齢の方の採用も検討しなければならない。学校町の支援センターは、街の中心にあり、高齢者から子供までが集う場所となっていた。世代を超える交流を行う政策は、街のにぎわいをつくるために有効のようだ。

○まごころ学園・まごころ寮ほかを視察

まごころ学園は、昭和 37 年に見附市、三条市、加茂市、長岡市、田上町の 4 市 1 町の構成で開始した。現在、まごころ学園、まごころ寮、相談支援事業所、グループホーム、多機能型事業所を運営している。まごころ学園、まごころ寮ともに、4 人が 8 畳で生活している。現在の法律では、6 畳 1 人になっているので、増築する予定（まごころ学園のみ）。また、施設自体も建設後 50、30 年が経っており老朽化している。入所者は、高齢化しており、18 歳未満向けの学園でも 18 歳以上の入所者が 24 人おり、7 割を超えている。高齢の入所者は、老人施設に行くべき人との境が不透明になってきている。グループホームは、市内中心地にあり男性、女性の数人に個室を与えられ共同生活している。まごころ学園、まごころ寮に入所し生活習慣を身に付けた人がグループホームへ移行してきている。新たなグループホームを開設予定。多機能型事業所では、グループホームから徒歩で通勤し、軽作業を行っている。

【所感】

入居者の生活状況を知ることができた。現在の法律に合わせ1人6畳への増築を早急にすべきだと感じた。まだ、計画されていないまごころ寮も加茂市として働きかけてはどうか。まごころ学園、まごころ寮は外出が自由にできていること、グループホームおよび多機能型事業所でも入所者を街の中で生活させることも、コロナ政策が世界的には人権侵害に当たるため、このような対応をしているのかもしれない。安全のために隔離するだけでなく、配慮しながら街に出て行ってもらう事が入居者にとって生活の向上になるのではないだろうか。